

『アーサー・ゴードン・ピムの物語』における半球的想像力 緯度と経度とモンロー・ドクトリン¹

下河辺美知子

はじめに：ジャンルと真実性

短編作家としてのポーは、「統一された印象 (unity of impression)」を与えるために「一気に読める (one sitting)」長さの作品を書くことを創作哲学としていると述べている。² しかし、唯一の長編小説である『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』(以後『ピム』)について言うかぎり、そこには様々なジャンルが混在しており、ポーの創作哲学に合致した作品になっているとは言い難い。ことに問題なのは、現実性について両極端のデイスコースがこの作品の中で混在していることである。実際の航海記録のごとくリアリスティックな描写を取り入れている一方、物語が進むにつれて非現実的なシーン現れる。ことに、最後に出現する「屍衣を着た人間の像」(*Pym* 217) は、我々読者から見ると、象徴的な意味を凝縮させたものと思えず、リアリスティックに始まったこの作品が一気にシンボリズムへ跳躍しているように読めるのだ。

とは言え、われわれ読者側のこうした反応をよそに、『ピム』の冒頭におかれた「序章」では、創作過程を説明するにあたり、この小説があくまで現実のことを書いた作品であるとの主張がなされている。自らの体験を書こうとしているピム氏は、その前書きで、「(自分の書き方に) 不器用な点があれば、そのために、かえって本当だと認めてもらえる可能性が増すだけだ」(*Pym* 4 圏点下河辺) という編集長ポー氏の勧めに心動かされて体験を書いたと告白している。また、編集長ポー氏が、執筆を渋るピムに代わって書いた最初の二回分は、小説として連載されたにもかかわらず「(当時の世間の人々から) 作り話だと見られている気配は少しもない」(*Ibid.*) ことをピム氏は知る。彼は「(自分の体験した) 物語の中の事実はそれ自体、嘘でないという証拠を伝える性質のものであること」(*Ibid.*) を確信してその先を書き続け、自らの冒険譚を出版する決心をしたのである。

この作品では、テキストの中に真実らしさの効果を持ち込むためにいくつかの方策が用いられている。一つは、当時ポーが手に入れることのできた旅

行記、科学的パンフレットなどの資料を利用することであった。まず、ピムが隠れて乗り込んだグランパス号で起こった叛乱については、1824年ハワイ沖でおこった捕鯨船グローブ号の反乱という実際の事件の記録から多くの材料を得て書かれていることが指摘されている。グローブ号の反乱という事実は「われわれが十九世紀アメリカに起きたこの出来事の酷さと、ポーがその歴史的事実と自分の作品をいかように絡めたのかを理解する助けになるであろう」(Beegel 7)とスーザン・F・ビーゲルは述べている。また、作品内に点在する船舶や航海術についての専門的な説明はウィリアム・ファルコナーの『海事事典』(*A New Universal Dictionary of the Marine* 1769)によるところが多いとの指摘がある。この事典は18世紀に英国商船に乗り組んだファルコナーが書いたもので、彼が死んだ後も何度も改訂版が出版されている。ジョアン・テイラー・ミードは、『ピム』第六章に書かれた船荷の積み方についての詳しい描写が、『海事事典』から得た知識によって書かれたであろうと推測し、1820年にニューヨークに設立された商業・貿易図書館(Mercantile Library)に1815年版の『海事事典』が収められているので「ポーはこの版のファルコナー事典を読んだであろう」(Mead 23)と述べている。

最も現実性が乏しいとされがちな南極のエピソードに関してさえ、ポーは実際の記録を参照して書いている。J.ラスレー・ダメロンは、南極のエピソードを書くにあたり、ポーが実際に極地近くを探索したウィリアム・スコースビー・ジュニア³の記録を用いていたことを検証して次のように言っている。「ポーは真実性を注意深く保ちつつ、それと矛盾することなしに驚くほど奇怪な効果(bizarre effects)を出すことに成功している。そして、その真実性をこの作品の冒頭から最後まで貫いたのだ」(Dameron 35)。

作品に現実らしさを与えるためには、言葉という記号とその指示対象を、読者が納得しやすいようにつなぐことが必要である。書かれた言葉が自分のなじんだ物や意味に自然につながるとき、読者はそこに書かれていることを現実だと感じるからだ。しかし、そこには読者も、作家さえも意識しないトリックが潜んでいる。それは、記号と指示対象との絆が、社会のイデオロギーが支えるコンテクストの中で結ばれるということである。『ピム』が書かれた時代のアメリカ社会のコンテクストが、この作品の中の記号と指示対象の結びつき方を支配していると考えるとき、そこには十九世紀アメリカ特有のさまざまなコンテクストが浮かんでくるであろう。

その一つはジョン・カールス・ロウが指摘しているものである。ロウは、“Poe, Antebellum Slavery, and Modern Criticism”の中で、アメリカ社会の中の黒人奴隷の反乱というコンテクストを『ピム』の中に読み取っていく。『サザン・リテラリー・メッセンジャー』に『ピム』の最初の部分が掲載されたのは1837年であり、作品内のグランパス号の航海は1827年に設定されている。この十年間にアメリカ社会で起こったこと——ナット・ターナーをはじめとした黒人奴隷についての出来事——をリストアップしたロウは、「この二つの年号の間に起こった歴史に残る出来事は相互に関係しており、『ピム』にあらたな光をあたえるであろう」(Rowe 127)と言っている。テキスト内の出来事、ことにグランパス号の反乱と恐怖は、奴隷反乱への不安と所有権を冒される懸念という白人が置かれていた社会的コンテクストの中で読み解かれるとき、当時の読者にとって『ピム』のディスコースが現実味を帯びてせまってくる。

奴隷制というアメリカ大陸内のコンテクストの中で記号と指示対象との絆を考察したロウに対し、本稿では、アメリカを大洋の中に据え、地球規模なコンテクストの中で『ピム』を読みたい。鍵となるのは1823年に米国議会で第七次年次教書を読み上げたモンロー大統領の言葉がもたらす半球分割の意識である。

1 『ピム』における空間的オリエンテーション

『ピム』という作品には様々なディスコースが混在していると述べたが、その中に共通して見えるものがあるとすれば、それは空間的位置取りの描写であろう。船の上や陸の上での位置が書かれた例をいくつか指摘したい。グランパス号に乗り込んで隠れていたピムは、出入りしていた蓋が開かなくなって船倉に閉じ込められてしまう。暗闇の中手探りで自分の置かれた位置を確認する下り(*Pym* 第2章)は、手で触れる物体の触覚のみをたよりに自己の位置をさぐる様子を細かく記したもので、「落とし穴と振り子」の暗闇での探索を思い出させる。

また、見知らぬ島(後にツァラル島とわかる)に上陸し野蛮人と交易したピムたちは、立ち去る間に谷間で挟み撃ちにあい、土砂くずれの下で生き埋めになってしまう。それは、「犠牲者を包んでいるあの真っ暗な闇、肺に対するあの物凄い圧迫感、湿った地面から発するあの息苦しい土いきれ」

(*Pym* 228) の中で味わう絶望と恐怖の体験として描かれている。暗闇の中で上下左右もわからぬ状況から光を見つけて這い出すまでのピムの様子は、身体感覚による位置取りによって詳しく記されている。

さらに、ピムたちはその後、島の台地のようなところに隠れて過ごすのであるが、高いところから島を見下ろして自己の位置を確認し、その後、高台から下へおろる試みが幾度も試される。それは、南の斜面、東の斜面、北の斜面と方向を限定して行われていくのである。

『ピム』の中で最もよく分析の対象となるのが、第23章にでてくる島の南斜面にある大きな穴の探索、およびその中にあった象形文字のような記号である。本稿では、象形文字の意味よりは、その穴の形状についてのポーの描写に注目したい。穴の長さ（「ほぼ四十五メートル」）とか、両側の絶壁の感覚（「平均して十八メートル」）とか、曲がり具合の角度などが、数字や図を使って具体的に記されている。ポーは、ピムたちが穴の中にいてどのような空間的位置にあるかに最大限配慮してこの部分を書いていると思われるのである。

とは言え、『ピム』というテキストの中で、空間的位置取りについて最も多くが書きこまれているのは海上での位置情報である。『ピム』が海の物語であることを証明してみよう。ペンギン版テキストの『ピム』は、表紙、「序章」、本文25章、および「ノート」で構成されており全部で221頁となっている。⁴ 本文25章に「序章」と「ノート」を合わせて全二十七章で構成されているとすると、そのうち陸上での出来事が記されているのは第19章から第24章の六章だけである。⁵ 残りの章は海上での出来事に費やされているのである。また、日数的に調べてみると、グランパス号の出航が7月17日で、南極海をカヌーでさまよっている最後の日付が翌年3月22日であるので、物語に書かれている期間は八か月と五日ということになる。そのうち、ピムが陸にいたのは、ゲルゲーレン島3週間、トリスタン・ダニエル島1週間、ツァラル島2週間の計6週間である。海上に六か月半、陸上に一か月半という比率を見ると、この小説が海の物語であるということが判明するである。

海上の出来事を書き連ねるピムの体験談は、日付のもとに記録を残す航海日誌風な体裁となっている。このようなディスコースに真実らしさを与えようとするれば、そこに現実の地理情報を書き加えることが効果的であろう。『ピム』の中には、果たして、あちこちに緯度と経度が数値として書きこまれて

おり、その時々々のピムの海上での位置が示されている。緯度と経度は、数字とアルファベット 4 文字 (N,S,E,W) の組み合わせである。この記号が地球上の一地点を指し示すとき、記号と指示対象とがつながれて、『ピム』のテキストに真実らしさがもたらされるのである。

2 南北移動：緯度から見て

八か月にわたるピムの航海中の移動を、南北方向で——つまり緯度情報として——見てみよう。ピムは、マサチューセッツ州ナンタケット（北緯 41 度 16 分）から、南極点近く（南緯 84 度を超えたあたり）まで南下したことになる。物語の始めのうちは地理情報が書きこまれることはなく、出航したナンタケットの位置もテキストには記されていない。初めて緯度・経度が書きこまれるのは第 4 章で、グランパス号の反乱が起こった位置（北緯 35 度 30 分、西経 61 度 20 分）としてである (*Pym* 51)。その後、第 14 章でピムたちはジェイン・ガイ号に救われるのであるが、そのとき、ピムは「われわれは、北から南へたつぷりと二十五度も漂流した」(*Pym* 135) ことを知るのである。その後、ピムは島や群島を通過し、そのいくつかに上陸するわけであるが、そこにも緯度・経度情報はきちんと書きこまれている。⁶

第 15 章に入ると一行は「その実在について、さまざまな議論が行われているオーロラ諸島と呼ばれる島々を徹底的に捜してみるつもりで、南西に向かって出航」(*Pym* 147) する。この探索の模様については、現代の GPS システムを使っているかのように、緯度・経度情報が詳細に盛り込まれている。⁷ にもかかわらず、島はついにみつからない。あたかも、シニフィアンとしての地理情報の過剰がシニフィエとしての島を消し去ってしまったかのようだ。第 17 章以下、ピムたちを乗せたカヌーが南極圏に入ってから、日付のもとに書きこまれる緯度・経度情報はさらに増していき、ついにピムは、「従来のどんな航海者たちよりも、さらに（緯度にして）八度以上も南」の位置に到達したのである (*Pym* 60)。

以上、緯度という観点からピムの移動を調べてみたが、それについて、二つのことに注目してみたい。一つは、南北という方向軸で見ると、ピムは一度ももどることなく一直線に南下の方向を進んでいることである。そして、二つ目は、ピムの南下が自らの意思だけでなく、他の要因によっても推進されていることである。

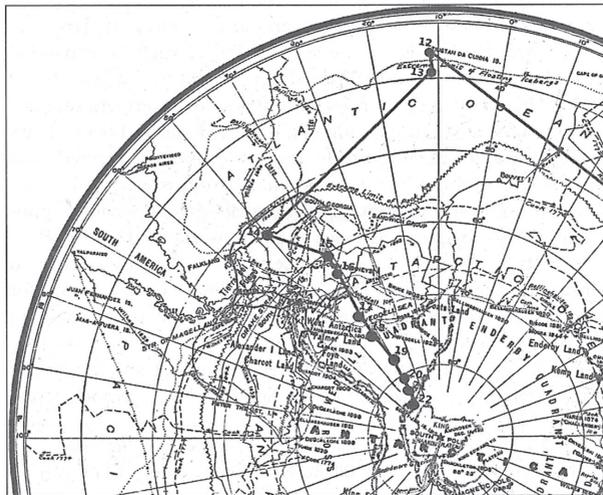
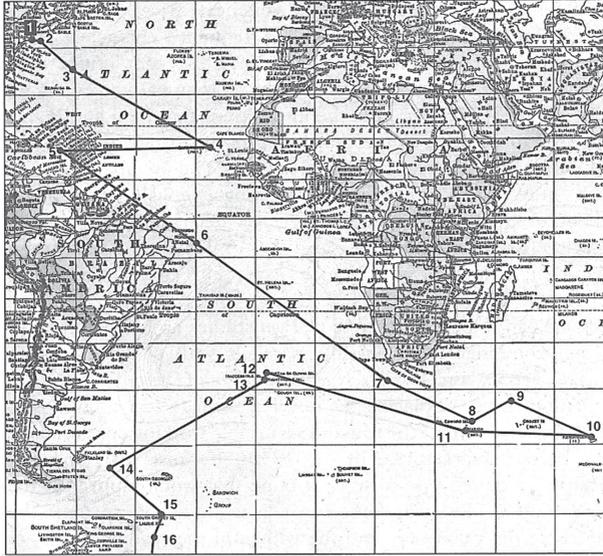
グランパス号に乗ったピムは、隠れて乗り込んでいるわけで彼の移動の方向は船長あるいは船主の意図が決めることになる。また、反乱側を倒して船を乗っ取った後、飢えと渴きにあえぎつつ残った4名で漂流している間、ピムの移動はひたすら風と海流とにまかされていた。その後、ピムはジェイン・ガイ号に救われるのだが、「ガイ船長は、天候がよければ、南極まで進もうと企てて」(*Pym* 50) いた。しかし、第17章になるとガイ船長の心に変化が生じてくる。彼は北へ航路をとって引き返すことを考えはじめているのだ。ここで説得に乗り出したのはピムである。彼はこのまま進めば陸地につけるという自信をもって、「しきりに彼(ガイ船長)をときつけ、せめてあともう2、3日は、今進んでいる方向にこのまま進んでいった方がよいと勧めた」(*Pym* 161) のだ。ピムのこの提案は受け入れられ、南へ進む推進役はここにきてピムが果たすことになった。

第25章入ると、ピムたちは野蛮人たちから命からがら逃げだし、カヌーでツァラル島を漕ぎ出していく。そのときの進路については、陸地が見つかるかもしれないという希望をもって「大胆にも、南へ向かって進んでいった」(*Pym* 212) と書かれている。ピムたちは、野蛮人から奪ったカヌーに手をいれてマストを作りシャツで作った帆をつけて航海をはじめており、ピムは、自分で進路を南へとっていると言えるかもしれない。しかし、カヌーを南へと押し進めていたのは「絶え間なく吹いている追い風」(*Pym* 214) と「きわめて強い潮の流れ」(*Ibid.*) であるとポーは書いている。南極圏でのピムの南下を画策したのは、ほかでもない作家ポーだったと言えよう。

ピムの南北移動は、風や潮流、ガイ船長、ピム自身、そして作家ポーによって一つの方向へと導かれたわけであるが、そこには、一貫して南への衝動がつかぬかれていた。ピムを南へと誘惑したのは何だったのか？ 当時のアメリカには西への衝動(西漸運動)という社会的コンテクストがあったはずであるが、南への衝動はそれとは異なるポー自身の個人的な欲望に根差すものである可能性があるのかもしれない。ガイ船長を説得したピムは、「南極大陸に関する大問題を解くという、心の弾むような機会」(*Pym* 161) を逃したくなかったと言っており、そこには、南へ進むことによって「ここをわくわくさせる自然界の秘密の一つ」(*Ibid.*) を解き明かしたいという科学者ポーの真実探究の欲望が隠されていたと見ることもできよう。

3 東西の移動：経度をたどって

南北移動に比べると、ピムの東西移動は少し複雑である。ピムの航海を示した地図⁸を見てわかることがある。ピムのたどった航路は西へ東へと行っ



たり来たりしているのである。南米大陸の東端近くでジェイン・ガイ号に救われた後は東へと進み、喜望峰を通過してインド洋にまで入りこみ、ゲルゲレン島に投錨し3週間を過ごす。しかし、その島を出航すると、船は一転して方向を西にとり、マゼラン海峡の近くでオーロラ諸島探索などをした後、南極海に入っていく。その後の航路については詳しく位置情報が書かれているが、緯度は数字が上がっていくのだが、経度に関しては西経42度あたりをうろうろしたままでピムの動向は途切れている。

東西移動の動線については、南北移動のような一貫性がないことに加えて、その範囲についても見ておくべきことがある。それは、ピムのたどった南下の距離が緯度にして180度分の131度分をカバーしており、地球軸の72.8%を移動しているのに対し、東西移動は、経度にして360度分の140度分、地球の円周の38.8%にとどまっていることである。南下という垂直方向の移動について見たとき、ピムは未知の領域にまで突入して果敢に突き進んでいくのであるが、東西の移動についてはおどおどとした動きをしているように思える。そこには何か意味があるのであろうか？

一貫性がないように見える東西移動ではあるが、その中に一つだけ隠された筋書がある。ポーはピムの移動に何らかの意図を込めているように見えるのだ。それは、さまざまな地域、いろいろな島や群島をめぐるピムの航海の中に、太平洋の航海が入っていないことである。ピムが三つの船に乗り込む各々の経緯や、乗り込んだ船の航路を仔細に検討してみると、太平洋からむピムの東西移動の特徴と隠された筋書が見えてくる。それは、太平洋へ乗り入れる機会が幾度かあったにもかかわらず、その時々で、ピムは三度にわたりその機会を逃しているということである。

『ピム』というテキストの中には「太平洋」という言葉が思いのほかよく出てくる。まず、第1章で、捕鯨航海の経験のある友人オーガスタスは、ピムに「いつも南太平洋の冒険談を話してやっていた」(Pym 7)ことが記されている。ピムはオーガスタスの話を聞いて、海の冒険にでかける希望を養っていたと思われ、海といえば太平洋をイメージしていたとしても不思議はない。

次に太平洋へ向かう機会が訪れるのはグランパス号に乗っているときである。オーガスタスの誘いによって、グランパス号の船倉にこっそり隠れていたピムであったが、その船の中で反乱がおこり、オーガスタスとともにそれ

に巻き込まれてしまう。反乱側には二つの派閥があり、その一方である料理番一派は、「この船本来の航路を取って南太平洋へこのまま進んでいき、そこで捕鯨するなり、また状況しだいで臨機応変の処置をとるという方針」(Pym 57) に決めていたのである。結局、反対側の一派が勝利して、この案は立ち消えになっている。

その後、グランパス号に残されたピムたち四名は大西洋を漂流し、南米大陸セントローク岬沖にて、ジェイン・ガイ号に救助される。この船はガイ船長が統括するリヴァプールの船で、「南海洋と太平洋とに向けて、アザラシ漁業と貿易とを兼ねた航海をしている途中」(Pym 133) であった。今度こそピムは太平洋へ向かう航路に自らを置いたかのように見えた。ガイ船長の腹案は「マゼラン海峡を通過して、パタゴニアの西の沿岸を北上する」(Pym 150) というものであり、あきらかに太平洋へ侵入する航路が想定されていたのである。にもかかわらず、ガイ船長は、マゼラン海峡を通過することなく南方に進むことを決心してしまい、ピムをのせたジェイン・ガイ号は太平洋へ向かわずに南極へ向けて南下していくのである。

そもそもポーがこの作品を書くにあたって用いたソースの多くが太平洋での体験や報告をしるした記録であることも見逃せない。にもかかわらず、ピムはついに太平洋をみることはない。『ピム』における太平洋の忌避には、何か意味があるのだろうか？

4 地球を縦に割るレトリック

アメリカ文化における移動というテーマを掲げるとき、これまでの研究では、西へむかう衝動が注目されてきた。土地を開拓しながら西へ進んでいく西漸運動が十九世紀アメリカの領土拡張の主要エンジンであったためである。そして、西への衝動は、西に広がる“荒野”を“文明化”することによって土地の所有権を主張するという形で実現されてきた。しかし、この時期のアメリカにとって、領土拡張と並んで重要な問題があった。それは、海をへだてた他の諸国——主としてヨーロッパ大陸の諸国——と自国がどのような位置関係にあるのかという問題である。

海洋国家としてアメリカを見ると、そこにはアメリカの位置を見直すあらたなる次元が浮かび上がってくる。地球という球体の上の新大陸で独立を果たしたアメリカは、海上に浮かんだ巨大な島でもあった。島であるならば、

アメリカは同じく海上に点在する他の島々——他の大陸とて面積の大きな島にすぎない——とどのような位置関係に自らを置くのか。出立してきたヨーロッパ大陸、自らとつながっている南アメリカ大陸、そして、ロシアの脅威がせまるなか気になり始めたユーラシア大陸などとの関係を、十九世紀のアメリカは国家の意識の中にとり込んでいたはずである。とすれば、海洋国家アメリカにとって他の大陸との関係をとるむすぶための大洋——大西洋、太平洋、インド洋、南極海——は、自国の位置取りをさぐるための意味が充満した空間であった。

さて、海上での位置は南北（縦軸）、東西（横軸）の二種類の組み合わせによって表されるが、それらはそのまま、緯度と経度という地理情報に置き替えられていく。⁹ 『ピム』のテキスト内にも、緯度と経度の数値が頻繁に書きこまれ、それがこの作品のリアリティを保証する役割を担っていた。しかし、「緯度と経度」と一まとめに扱われているが、実はこの二つには大きな違いがある。地球を180度に区切る緯線は赤道と並行に引かれた線であり、緯度が高くなるほどにその輪は小さくなり極点では点になる。一方、360度で地球を区切る経線は大きな円を描いており、どの経線も両極に集中する。しかし、なにより緯線と経線との違いが顕著になるのは、緯度の0度と90度が、極点と赤道という地理的条件によって定められているのに対し、経度0度と180度は恣意的に設定されているにすぎないということである。経度の測定技術が確立するまでの長い歴史を書いた『経度への挑戦』の中で、デーヴァ・ソベルは経度の基準線の移り変わりを、紀元前のプトレマイオスの地図から歴史の中で追跡している。ソベルによれば、「地図が作りなおされるたびに、子午線の位置は動いた。アゾレス諸島からカーボベルデ諸島へ、またローマからコペンハーゲン、エルサレム、サント・ペテルブルグ、ピサ、パリ、フィラデルフィアを転々として、ようやくロンドンに落ち着いた」(Sobel 3-4) とのことである。

本初子午線（経度0度0分0秒）の設定には、その時代の文化的宗教的思惑や政治的欲望がからんでいるのだ。架空の線にすぎない経線、ことに本初子午線には、なぜさまざまな意味が付加されるのか。それは、地球という球体を縦に分割する機能が与えられていることと無関係ではない。ロンドンのグリニッジを経度0度設定するとき、世界はそこを基準に西と東に二分割される。考えてみればずいぶん人為的なことである。そして本初子午線が地球

表面上のある一点を通るべく固定されるとき、180度裏側とを結ぶ切り口で地球という球体は二分され、一方の半球には「東」、もう一方の半球には「西」という属性が付与される。二つの半球が、〈こちら側〉と〈あちら側〉というあらたな空間として立ち現われるのはこの時である。

*

J.C. ロウが、奴隷反乱への恐怖という社会的コンテクストを『ピム』の中に読み込んだことはすでに述べた。これに対して、本稿では『ピム』が書かれた時期の別のコンテクストの中でこの作品を読んでみたい。1823年、地球を縦にわって西半球と東半球に二分するレトリックがアメリカ大統領の口から発せられた。後にモンロー・ドクトリンとよばれるようになるディスコースである。

1823年12月2日モンロー大統領は米国議会において第七次年次教書を読み上げた。それは6,383語の長文の演説であったが、その中の一部、二か所にわかれた三パラグラフの計956語が、後にモンロー・ドクトリンと呼ばれアメリカの外交政策の基本とされることになる。以下の部分は演説の後半にでてくる下りであり、南北アメリカ大陸に干渉しようとするヨーロッパ諸国にたいするアメリカ側の反応である。

それ故、われわれは以下のことを率直に宣言することが合衆国とあちら側列強諸国との間の友好的関係のための義務である思っている。ヨーロッパの政治システムをこちらの半球にたいして拡張しようとするヨーロッパ諸国側の企ては、それがいかなる部分に対してのものであれ、われわれの平和と安全にとって危険なものと思なざるを得ないということである。[48-11 圏点下河辺]¹⁰

「友好的関係のため」という文脈に置かれているとはいえ、ここでは〈われわれ合衆国〉と〈彼ら列強諸国〉という対立が設定されている。モンローは「(彼ら側の)政治システム」をこちら側に拡張しようとする試みがあれば、われわれはそれを「危険なもの」つまり敵対的行為と見なすと〈彼ら列強諸国〉に宣言しているのだ。その際使われているのは「こちらの半球」という言葉。独立から70年たったアメリカは、世界を西半球と東半球に分割して自国の位置をさだめ、自と他という対立を設定したのである。

対立とは世界を二分するレトリックである。モンローの演説の中で提示された二分法は、国家の対立——〈合衆国〉対〈列強諸国〉——¹¹ そして、大西洋をはさんで向かい合う二つの大陸——〈アメリカ大陸〉対〈ヨーロッパ大陸〉——などである。そして、これらの対立によって、「(彼らの) 政治システム」つまり植民地化¹² をおよぼそうとする〈あちら側〉(東半球)と、それを拒絶する〈こちら側〉(西半球)という二つの空間が出現したのである。

〈あちら側〉としての旧大陸が、〈こちら側〉の新大陸に欲望の目をむけて干渉してくるのは確かであるが、ここで、問題としたいのは、モンローのレトリックの中で「西半球」という言葉が使われたことだ。地球は垂直に二分され、アメリカはその西半分に自己の位置を置いたわけである。しかし、「西側」とはどこを基準に名付けたものなのか？ 経線によって地球に縦の目盛りをつけて球体を分割していくとき、その経線の一つ、グリニッジを通る0度に包丁をいれて二分したのが西半球と東半球という概念である。そして、それがいかに恣意的な設定であるかはすでに説明した。本初子午線を別のところに設定すれば、「西側」は「東側」へ、「東側」は「西側」へ逆転する。しかし、この予測不可能性がアメリカの中で顕在化するの二十世紀に入り、航空機による空間移動が政治と文化を動かすようになってからのことである。

モンローの言葉によって二つに分割された半球がそこにあり、アメリカはその片側を自分たちの領域、あちら側を他者の領域と宣言した。¹³ 「半球」という言葉を使ったモンローの言葉は、地球を垂直に分割する形のグローバル化を開始したと言うこともできよう。地球の表面にヴァーチャルな経線を縦に引くことが、空間把握の基本的操作となったのである。十九世紀のアメリカ合衆国は、大西洋と太平洋という二つの大海にはさまれて、自国の位置を垂直的な感覚をもって探っていた。そして、大西洋をはさむ分割法で地球を見ていたアメリカにおいて、縦の分割が行われる場としてもう一つの大洋があらたな意味を持つことがどれほど意識されていたのだろうか？

5 『ピム』の太平洋

『ピム』は、モンローの言葉が半球分割のレトリックを届けてから15年後の1837年に書かれている。この小説の中に、二十一世紀のグローバル化につながる地球規模の空間認識が織り込まれているのではないか。本論が

検証したい点はここであった。

東西移動でみると、ピムの航路はギザギザでそこに一貫性は見られない。南北移動がひたすら南下するものであり、そこに南への衝動が表われていたのと対照的である。では、経度を追跡することから見えてくるピムの東西移動には何の意味もないのだろうか？東西移動に一定の方向性のないことそれ自体に『ピム』を書いたポーの無意識が現れている可能性があるのではないか。そこに、小説家ポー個人を超えて、ポーが生きた十九世紀前半のアメリカ国家の潜在的な思惑を読み取ることができるのではないか。

世界を〈西半球〉と〈東半球〉に分けたモンローのレトリックは、新大陸と旧大陸を対立させるものであった。地球儀を前にその言いぐさを再点検するとき、〈こちら側〉と〈あちら側〉を分割しているのは大西洋であることがわかる。独立から数十年をへたアメリカは、海に挟まれた海洋国家として、大海の中で自己の位置をさぐろうとしていた。一方、東へ行ったり西へもどったりという航路をたどっているピムは、東西移動において一貫した方向性を示せない。ピムが演じていたのは、自分の身体の移動によって東西という対立の中での自己の位置を確定できないそのことであった。ピムの移動の優柔不断さは、海洋国家としてのアメリカが地球をどこで〈東〉と〈西〉に分割し、そのどちらに自らを置くかをさぐる様子のアナロジーであると考えてみたい。

緯度に現れた移動は「南への衝動」としての一貫性を持ち、それは未知の領域へのパイオニア精神の表れとも言えた。一方、経度に現れた移動には、経線の本来的な意味が隠されている。縦に地球を割ることで、味方と敵を峻別する衝動である。ツァラル島の野蛮人の悪意に満ちた攻撃と、それにたいする激しい軽蔑の様子は、当時のアメリカ国家が〈こちら側〉と〈あちら側〉という二分割によって敵への憎しみと警戒を基本的な情動としていたことを浮き上がらせている。

経度のもたらす想像力はさらに膨らんでいく。経度0度が設定されている地点の恣意性に気付くとき、グローバルな空間における自己の位置の不確実性についての不安が増していく。グリニッジに経度0度が置かれたのは、たまたま西洋中心の世界観がもたらしたものであるにすぎない。経度0度は太平洋上の日付変更線の上におかれていてもよかったし、シベリアの真ん中にあってもよかったはずだ。緯度0度は赤道にあるのが自然の法則であるが、

恣意的に設定された経度0度による地球の二分割はたやすく脱構築されうる危ういものだ。

ピムの時代のアメリカからみれば、太平洋とは西漸運動の果てにある西方の海である。しかし、その太平洋の真ん中で西半球は東半球と出会うのだ。〈西〉であるはずの太平洋が〈東〉の領域を占めている事実を前に、十九世紀当時の太平洋に対する意識にはわかに現実感を喪失する。ピムを太平洋に進入させなかったのは、ポーにとってその大洋が見慣れぬ不気味な空間であったからだ。十九世紀アメリカ文化の中に潜在する、太平洋という空間への無知と嫌悪を読み取るとき、『ピム』と言う作品に新たな読みが一つ加わるのである。

おわりに：垂直の想像力

ピムの物語は、船中、陸（島）の上、海上といった三つの空間を舞台として展開されている。どの場所においてもピムが置かれた空間的位置取りが詳細に書きこまれていることはすでに述べたが、そこで顕著となっているレトリックがある。“垂直”や“直立”といった空間的イメージである。「切り立った絶壁 (the precipitous ledge)」(*Pym* 171)、「頭の上におおいかぶさってくる絶壁 (the precipice)」(*Pym* 182)、「切り立ったところはあるが (much more precipitous) おおむね四十五度くらい」(*Pym* 229)、「勾配がほとんど垂直の (nearly perpendicular) ところでは」(*Pym* 186)、「その地面が縦に割れて垂直な地層 (perpendicular layers) になるか」(*Pym* 188) といった表現が頻出しているのである。

垂直のイメージがクライマックスになるのは最後のシーンである。南極圏に深く侵入したピムたちの前には水蒸気の峯が現れて、「その瀑布がひっそりと海中に転げ落ちていく (rolling silently into the sea)」(*Pym* 216) とき、われわれの目には垂直に立ちはだかる滝の情景が浮かんでくる。そして、ピムたちが最後に見たもの、それは、水平線 (the horizon) と一体となった瀑布の中に「(垂直に) 立ち上がってきた (arouse) 屍衣を着た人間さながらの姿」(*Pym* 217) であった。垂直に落ちてくる滝の中に垂直な形で口を開けている裂け目にむけて突き進むカヌーと、そこに直立して立ちはだかる白い像。地球を縦に二分割するという垂直の想像力がもたらす恐怖が、南への衝動によって突き進むアメリカ国家の行く手に待ち構えているのである。

引用文献

Primary Sources

Edgar Allan Poe, *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*, edited with an Introduction and Notes by Richard Kopley, Penguin Books, New York: 1999. Print.

A compilation of the messages and papers of the Presidents/ prepared under the direction of the Joint Committee on Printing, of the House and Senate, pursuant to an act of the Fifth-Second Congress of the United States; with additions and encyclopedic index by private enterprise; [compiled by James D. Richardson] vol. 10. New York: Bureau of National Literature, c1897-c1917.

Secondary Sources

Dameron, J. Lasley, "Conclusion or Beginning?" in *Poe's Pym : Critical Explorations*. Ed. Richard Kopley, Durham and London: Duke University Press, 1992. 33-43. Print.

Geegel, Susan F. " 'Mutiny and Atrocious Butchery' : The *Globe* Mutiny as a Source for *Pym*," in *Poe's Pym : Critical Explorations*. Ed. Richard Kopley, Durham and London: Duke University Press, 1992. 7-19. Print.

Mead, Joan Tyler, "Poe's 'Manual of Seamanship,'" in *Poe's Pym : Critical Explorations*. Ed. Richard Kopley, Durham and London: Duke University Press, 1992. 20-32. Print.

Perkins, Dexter. *The Monroe Doctrine, 1823-1826*. 1927. Cambridge: Harvard UP, 1955. Print.

Rowe, John Carlos, "Poe, Antebellum Slavery, and Modern Criticism," in *Poe's Pym : Critical Explorations*. Ed. Richard Kopley, Durham and London: Duke University Press, 1992. 117-138. Print.

Sobel, Dava, *Longitude: The True Story of a Lone Genius Who Solved the Greatest Scientific Problem of His Time*, Walker & Company, New York, 1995. Print.

- 1 本稿は以下の二つの学会にて日本語、英語で行った研究発表の原稿を大幅に加筆・修正したものである。「『アーサー・ゴードン・ピムの冒険』における緯度と経度の想像力」日本ポー学会全国大会 2014年9月13日於慶應義塾大学。“Vertical-Horizontal Imagination in *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*: Monroe Doctrine and Nautical Discourse in 19th-century America,” The Poe Studies Association’s Fourth International Edgar Allan Poe Conference, February 28, 2015, Manhattan, New York.
- 2 If any literary work is too long to be read at one sitting, we must be content to dispense with the immensely important effect derivable from unity of impression — for, if two sitting be required, the affairs of the world interfere, and every thing like totality is at once destroyed. “The Philosophy of Composition”
- 3 William Scoresby, Jr., *Journal of a Voyage to the Northern Whale-Fishery; Including Researches and Discoveries on the Eastern Coast of West Greenland, Made in the Summer of 1822, in the Ship Baffin of Liverpool* (1823; rpt., Yorkshire, England: Scolar Press, 1980). Print.
- 4 Penguin 版では Chapter 23 の次の章が Chapter 23 bis となっており、最終章が Chapter 24 になっている。
- 5 「序章」と「ノート」はピム氏、ポー氏が語っている形であるので、こちらも陸地と言えるかもしれないが、ピムの冒険の内容としては省略した。
- 6 プリンズ・エドワード島（南緯 46 度 53 分 / 東経 37 度 46 分）、クロゼ諸島（南緯 42 度 59 分 / 東経 48 度）、ケルゲーレン諸島（南緯 49 度 21 分 / 東経 70 度 13 分）、トリスタン・ダ・クーニア群島（南緯 37 度 8 分 / 西経 12 度 8 分）
- 7 「（島があると言われる付近を）南緯 53 度の緯線に並行して、西経 50 度の子午線まで西方に進み続け、今度は来たに向かって南緯 52 度の緯線まで進み、そこあら東へ向きを変えて、朝と夕方、緯度高度を二倍にし、かつ経線高度を大惑星と月のそれにしたまま、南緯 52 度の緯線に沿って進んだ。……一行は、この付近にどんな島々があったとしても、いまは跡形もないのだというこを、はっきりと納得した。」(*Pym* 148 - 149)

- 8 この図版は *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*, eds. Frederick S. Frank and Dian Long Hoeveler, Broadside Edition, 2010. Print. 30 頁 (“Introduction”) に収録されている。編者による Introduction では、当時の海図の中にピムの航海を書き入れたものがなかったことについて以下のように言っている。We were quite surprised, however, to discover that no one had attempted to map Pym’s voyage on a map of his time period, and doing so proved what we suspected: that Poe’s voyage is, as described, quite impossible (see Illustration 2, above, for a literal “mapping” of the trip). The various ships that Pym sailed on could not possibly have crossed such distances in the time that Pym claims they did. (31)
- 9 十九世紀には、緯度の測定は航海術の基本的技術として確立されていたが、一方、正確な経度を測る技術はなかった。詳しくは Dav Sobel, *Longitude* を参照のこと。
- 10 モンローの第七次年次教書のテキストからの引用箇所の表示は [パラグラフーセンテンス] の順に数字で示してある。[48-3] は第 48 パラグラフの第 3 センテンスのこと。
- 11 モンローの演説の中で、「あちら側」を指す言葉が使われているのは計 11 か所である。Spain という国家の名前が一度、Europe が一度出てくるほかは、すべて power(s) という単語が使われている。詳細に挙げてみると、the allied powers が 4 回、European power(s) が 4 回、other powers が 1 回である。各々の言葉がヨーロッパのどの国、どの連盟をさすかについては多少の揺れはあるものの、「あちら側」をさすこれらの記号の向こうにある指示対象は、イギリス（場合によってはロシア）をふくむヨーロッパ大陸となっている。
- 12 モンロー演説の神髄としてしばしば引用される以下の部分を読むとき、十九世紀始めのアメリカが何よりその侵入を嫌がっていたものが見えてくる。
……南北アメリカ両大陸は、それらが当然として保持しているところの自由で独立した状態によって、今後、いかなるヨーロッパの列強諸国によっても将来の植民地化の対象と見なされてはならない。[7-4 圏点下河辺]
独立を果たし、今や国家としての力と威信を蓄えつつあるアメリカは、か

つて自分たちが置かれていた植民地という状況を振り返り、ヨーロッパ諸国の植民地化の欲望が、これ以上、大西洋のこちら側で実現することを許さないという決意に燃えていた。

- 13 モンロー・ドクトリンのレトリックが語ることは大きく言って二つある。一つは地球を二つにわってあちら側がこちら側に侵略・支配を目論むことを拒絶すること。これは、ヨーロッパ側の“西への衝動”をアメリカ側が抑止しようとするものと見ることもできるであろう。MDのレトリックのもう一つの意味は、西半球という領域を設定したことにより、南半球に位置する南米大陸を包含する欲望をそこに抱え込むことになったことだ。東西で自他を分別するとき、東西という半球の対立を強調するとき南北の対立は隠ぺいされ、南へ拡張する欲望には検閲がかけられないという事態がここに出現したというわけである。